
幼稚園百三十年記念企画 アーカイブズ『幼児の教育』(5) *****

今回のアーカイブズは、「幼児の教育」第二十六巻 第六号（大正十五、一九二六年）に掲載された、園児の母親自らの貴重な保護者会の記録、大江政衛「保護者會に臨みて感じたるまゝ、を」の全文である（四十六―五十頁）。今号の特集テーマ「保護者の保育参加」にちなんで、八十年前の保護者と幼稚園の関係を振り返ってみたい。

保護者會に臨みて感じたるまゝを

大江 政 衛

「お母さん、明日僕はおやすみです、お母さん幼稚園にいらつしやい」と通知書をさし出す。

「○○のおだだを先生に申上げやうか……それともお働巧な事計りにしやうかしら……」

「お駄々なんか嫌い、そんな事いつたらお母さんが叱られるよ」

など話合ふうちに其日も暮れて、翌七日午前九時といふ

に登園いたしました。

設備されたる遊戯室には、はやも幾多の保護者達が着席して居られました。空席に座して正面を見る、鐘輝さんの軸物、「テーブル」の上には五月人形や具足や菖蒲などが飾られてある、このやうな装飾は家庭以外には幼稚園ならではの味ひ得ぬ情趣であると感じました。

○○さんのお母さんは御出席であらうか、どの様なお

方様たらう？ ○○さんは、どなた様が入らつしやつただらう？ などと愛児の友達から連想するお母様達もおなつかしく、このやうな時に、日頃の御教養振りや、御家庭での御様子など伺ひたいと切に感じましたが、さて御顔に見知りもなく、口切りも得せずさりとてもと勇気を起して、二三の御母様に御言葉をかけると、何れも何れも思ふ組の方々ではなく、少々失望いたしました。

せめては、めいめいが名のり上げぬまでも、保護者の場席も、あらまし組別にでもしてあれば、如何に實際下手な自分ごときものも、御懇談上便宜であらうになど、考へて居るうちに時はすぎて校長並に主事の御臨場引つづいての御話、一々身にしみて有がたく拝聴いたしました。

校長閣下よりの御話の要領は、此度文部省令によつて幼稚園の保育方針を明瞭にせられたのは、誠に教育上の一大進歩である。

幼稚園では、従来円満なる身体の発育と善良なる習慣を養成するのが主旨であつただけけれど、今度の要旨に示されたものは、円満なる身体の發達を計る外に、善良

なる性情を涵養するといふことを以つて、其方針とせられた。

これはよほど幼児の内面的生活の上に、意味の深い事を教へられて居る。という様の御話であつたかの様に思はれました。

次に主事殿の御話は、實際多年の御経験よりしての御教示とて、一般的の事から、引て日々の細い實際事項についての御注意を、おきかせ下さいました。其要点は

- 1、目下登園児の出席歩合は至つて良好である其原因は季節の良好な事も一因ではでありませうが、一因には幼稚園並に各家庭の注意による幼児の健康と、日々の作業の興味とが、しらずしらずの内に登園をよろこばすものと思はれる。

- 2、出欠席の事は、学齢に達した教育ほどに、やかましく幼稚園では申しませんが、善良なる習慣を養成するといふ点より申せば、なるべく欠席は勿論、規定の時間におくれぬ様登園させてほしい。

- 3、服装の事は、以前の幼児に比べると、如何に軽快に運動に適して居るかは今更説明を要しない。どう

か今後も、現今以上の資質を以て華美にならぬやう希望する。

4、幼児に厚着させる事は、運動をさまたげ、時に発汗より冷却の際、往々寒冒を誘発せしむるおそれがあるから、なるべく薄着になれしめて、発汗を調節し、また帰宅の途、車中に入ったたねなどした時には、通り風のあたらぬ様附添の者が細心の注意をせねばなりません。

5、体格検査の結果は、それぞれ御家庭に通知いたしますが、個人の治療までは、届かないのですから、愛児の保健上、何等かの故障あつた際は、充分徹底の治療を希望します。特に伝染性の疾病は、多数児童への関係も大ですから、一層の注意を要し、罹病中は勿論、予後の治療撰養をも充分にして、登園をいそがれざる様希望致します。

6、御弁当を開いて無心に食事する、幼児の心境を考へると、理屈ぬきの温情に其幸福を感じます、今後にも特に注意して、季節がはりのため、また暑氣に入つては、一しほ味の変わらぬやう、特に品質種類を

選択して、調理し其分量にも御注意を乞ふ。

以上の事々は主に毎日起る実際上の御注意を伺つたので、これに次いで、やはり主事殿よりも、此度の要旨中に示された、善良なる性情の涵養といふことは、特別幼児の心情心境に関する内的方面の交渉で、よほど周囲のものが教養上に注意を要する事項であるから、家庭においても愛児の取扱は特に微細の御注意を乞ふ。といふ様の御話であつたと記憶致して居ります。

此日先生の御話は「勿れ主義」でなく、何事も幼児の身辺に渉るさまざまの御注意、何れも積極的に「かくあれ」「かくあらまほし」「今後も一層の努力と御注意とを乞ふ」といふ様の御話振りで、「かかる事は困る」「こういふ事はよくない云々」とたしなめられるのでないだけに、保護者としての責任感は一層に力強く感ぜしめられました。

子供の性情を陶冶する責任者は、申までもなく其両親、ことにも母親が第一人者でございます。尤も祖父母親姉教師も大に責任者の一員として考へねばなりません。が、しかし、親は子のためによりよい事を選びのぞみま

すが、一体何を子供のために求めるのが正しい道であらうか、よりよいものといふのは何であらう、評判のよい幼稚園に神かけての籤引に前祝をしたり、物たちをしたり、いざ検定となると、其心持は子供には想像もつかない、全く親の試練であります。

小学校、中学校、高等学校、大学と、つぎつぎの要求何が標準となつて母は働いて居るのでありませうか、誰れしも我子を愛する、愛すればこそさまざまの欲求もあれば、要求もする、それは如何なる場合にも正しい事計りでありませうか。これについて私はゼベタイの子の母の心情を想像し、また反省いたしました。ゼベタイといふのは、ガリラヤ湖畔に住む漁師で、其子にヤコブとヨハネといふ二人の子供がありました。この子の母はサロメといつて、其姉にマリヤといふ信仰厚い婦人もあるこのサロメとても日頃信仰のあつた知情意共に兼備の良婦人でありました。この婦人乃ちこの母が常に愛児の将来を思ひ、いろいろと考へぬいた揚句、或日其児等の恩師に向つて一生懸命に嘆願いたしました。

「師よ、折入つての御願を何卒きいて下さい、承ればあ

なたは、近く御一身に御榮譽を御受けになつて、王位に即かれる様に伺ひました、どうか其節には、師よ、私の愛するこの二人の子を、一人はあなたの右に、一人は左に侍らして御使ひ下さいませ。」とひたすらに御願ひいたしました。

子を思ふ一念、母の声としては、誠に切なるものではあります、一面から申せば、身勝手な要求でありました。いひかえれば、我児を愛するあまりに、いままでは控えにひかへて居つた慎みから、勇気を起して師にねがつた唯一の要求は、かやうにやはり世間並で、王位につぐ地位高官であつたのでございました。

この要求に接せられた師は、速座に「汝等は求める所をしらないものである」とたしなめられ、つづいて深刻な御教示をあたへられました。これは有名な話でございます。私はこの話をきいて、自分もこの種の母ではあるまいかと反省せずには居られません。否この母よりも、より以下にあるでありませう、信仰の萌芽もなく、望む事計りはこの母の如くにありはしないだらうか、さすれば何のとりえもない母ではありませんか。

サロメは子に引さるる愛に、一寸間違つた欲求を起しましたが、信仰あつたこの婦人のさかしさは、すぐに身分の非をさとり、罪を悔いて、落つた生涯に入りました。まことにうらやましい心がけであると存じます。

これによつても考へらるるは、幼稚園保育の要旨とする身体の発達並に善良なる性情の涵養といふことであります。これは全く自覚ある婦人の信念によつて、正しく



大正十五（一九二六）年四月、わが国最初の幼稚園（のみ）に関する法令「幼稚園令」が公布された。この保護者会（「保護者会」という名称は意外と古かつたのだ）はその直後のもので、幼稚園令の趣旨について「校長閣下」（茨木清次郎か）や主事（堀七蔵）から保護者に対して説明がなされている。大江はそれを拝聴し、母親としてのわが身の至らなさを悔いたり、責任感を新たにしたりしている。大正期を経て、「家庭教育」という言葉が市民権を得、「教育家



つちかはれたものでなければならぬと思ひます。先づ其正しきを神の国にもとめて然る後に実施すべきでありませう。其方針をあやまり、其根本を忘れては、真に善良なるものは恵まれぬと観念せねばなりません。

まことにかどうかどしい思ひも後日の思出るところにしたらためて此上の御導きを希望するしだいでございます。

（一部、仮名・漢字遣い等を改めた。編集部）

族」が立身出世・学歴主義を追求する時代となつていたが、その中で、自分もサロメと大差ないのではないかと反省する大江の姿は、現代の多くの親に通じるだろう。大江が、せめて組別に座席が分かれていればよかつたのに、と失望している姿は面白い。この時代の親も、ただかしこまつて先生の話聞いて満足していたわけではなく、親同士の交流をしないと望んでいたことを知るからである。また「勿れ主義」でないポジティブな助言が保護者を力づけるという指摘も現代的で鋭い。

（編集部）